

# 命あるものから学ぶキャリア教育の芽生え ～子供たちによる小動物が幸せに生きる環境づくり～

学校法人八王子学園なかよし幼稚園

清水 弘美

他 9 名

## 1. はじめに

今回の研究は、子どもたちが動物とのかかわりを通して非認知能力を育成していく経過である。

本園では継続的に沢山の動物飼育を行っている。現在は、ウサギ 5 羽、チャボが 12 羽、文鳥 5 羽、モルモット 2 匹、りく亀 1 匹、蛙 2 匹、フトアゴヒゲトカゲ 1 匹、金魚 2 匹、熱帯魚 20 匹、コオロギ 100 匹などを通年で飼育している。夏には昆虫も飼育して、子供たちにとって生き物は友達感覚である。

動物は成長が明確で、世話をしないとすぐ汚れる、乱暴に扱えば暴れるなど、ぬいぐるみとは異なり感情を持っている。また数年で寿命が終わるので、毎年少しずつ死んでいく姿を見ることができる。どんなにかわいがっていても長く生きてると命が終わることを体験し、命について考える機会となる。動物は子供たちにとって、自分の思うとおりにならないものがあるということを教えてくれるものである。

数年世話をした鳥やウサギなどが死ぬのは、夏に捕まえて飼っている昆虫が死ぬのとは重さが違い、子どもたちの心に悲しみとあきらめの感情を残すことになる。自分が死ぬことは想像することは難しいが、生きている間に楽しくしてあげようという今を大切にすることは理解できる発達段階であり、命を考える機会となる。

本園の特徴である動物飼育の環境を生かして、子どもたちに命について考えること、今を大切にしていけることなどを体験させたい。

## 2. 研究のねらい

子どもたちの一生を左右する非認知能力の育成に寄与することを期待した取り組みである。どのように生きるかというキャリア教育の視点を本園では以下のようにとらえている。

- (1) 「生きること」 生きていることの価値に触れて、命の大切さに気付く
- (2) 「学ぶこと」 共に何かを作っていくことの楽しさを体験し、友達のよさに気付く
- (3) 「働くこと」 誰かのため、何かのために役に立つことのよさに気付く

上記のキャリア教育を通して、非認知能力を育てていくことをねらいとしている。それ

に伴い、育成を目指す非認知能力を以下の通りにとらえている

(1) 課題を達成する力（一歩前へ踏み出す力）

・・・行動力、意欲、希望 チャレンジ精神、好奇心

(2) 感情を調整する力（自分を信じる力 考えぬく力）

・・・自己肯定感、自己有用感、自信、正義、主体性、忍耐、

(3) 人とつながる力（人間関係をつくる力）

・・・チームワーク、共感性、リーダーシップ、思いやり、尊敬

これらの非認知能力は、言葉で指導することで身に付けさせることはできない。非認知能力を使う体験活動の繰り返しで高められるものである。小動物の飼育を通して、動物の継続的な世話をを行う活動をさせ、責任感をもたせていく。動物の幸せを願ってよりよい環境を作ってあげようと思う優しさを育てる。友だちと相談しながら協力して作り上げる主体的な行動力を培う。そして、他の学年にも広げて、みんなで楽しい幼稚園を作れているという自己有用感等の非認知能力の育成を図るものである。

これらの活動から、自分のよさを見付けたり、友だちのよさを見付けたりして自分の強みに気付かせていくことができると考える。

### 3. 研究の流れ

(1) まず、子どもの意欲を引き出す環境づくりを行なった。小動物（ウサギ2羽）を年中組の子供たちの教室においておく。子供たちは皆でのぞき込み口々に「かわいい!」「さくら組（自分の教室）にほしい!」などと言っていた。「うちの教室で飼育をしたい」という気持ちでみんなが願いをもった。



(2) 自分たちの願いを叶えるために、みんなでどうしたらいいかを話し合った。そして、「園長先生にお願いに行こう」と言うことになり、皆で園長先生に会いに行った。園長先生の許可がでたところからのスタートである。

さらに話し合って当番を決め、ウサギの世話を始める。この段階では、ウサギを飼いたいとは言ったものの、ウサギを抱けない子供が90%程度であった。

ぬいぐるみとは異なり生きているウサギは糞もするしおしっこもする。毎日世話をしないとすぐに汚くなってしまふ。子供たちにはウサギの糞尿の掃除は困難なので、ウサギを出して大人が掃除をする間見させていた。

(3) 「ウサギのためになることをするにはどうしたらいいだ

ろう」とみんなで話し合っ、ウサギハウスを休み時間に作っていくことになった。学級全体の取り組みではなく、関わりたい子が関わっていくという形で無理のない形で始めた。はじめは小さな遊び場だったが、どんどんつけ足していったいろいろな部屋が作られてきた。

友だちとアイデアを出し合い、相談して作り始めた。



- (3) 年少組の子にもウサギを見せに行ったり、触らせてあげたりとウサギを通した異年齢交流活動を行い、小さい子に優しくする態度を養った。

製作に向けて工夫し合っってコミュニケーションをとっていく子供が増えてきた。段ボールと一緒に押さえて養生テープを貼ったり、スポーツジムの中にはバーベルなども作っていた。ウサギがジムで体を鍛えることはないが、こだわりを楽しんでウサギハウスは作られた。



- (4) 偶然、2つのクラスで育てているウサギがウサギハウスの中で出会ったことで子ウサギが生まれた。

このことは命のつながりについて考える機会となった。

新しく生まれた子ウサギも名前を付けてかわいがっている。

子ウサギに触れたことから飼育に関われる子どもが増えた。

子ウサギは職員室で飼育をしていたため、毎日何人もの子どもが見に来ていた。毛の生えていないウサギを不思議そうに見ていた。保護者の中にも毎日見に来る人がいた。親子の会話に広がりを見せていた。

- (5) 一方、園全体で育てていたウサギが9歳になっ

て天国へ行った。何ができるかもクラスで話し合っ

て弔いを行った。手紙を書く子、折り紙で花を折る子、好物だった果物や野菜を持



ってくる子もたくさんいた。死後硬直で固くなったウサギを触って「カチカチだあ」と言っていた。特別な体験である。

#### 4. 研究の成果

##### キャリア教育の視点1「生きること」

動物の飼育は継続性が大切である。ウサギの一般的な寿命は5～8年。チャボは10～15年、動物はこれからも飼育を続けることになる。年中組で始めたウサギの飼育はそのまま年長組に引き継ぎ、子供たちにとってウサギは生活の中で共に暮らす仲間になっていく。

動物は人間がどんなにかわいがっていても、扱い方を雑にすると暴れて小さなひっかき傷などをつけられることがある。ぬいぐるみではなく生きているものはみな不快な状況から逃げ出そうとすることを知ることができる。動物は自分の命のままに行動しているので、子供の思うとおりにならない、幼稚園の子どもたちは日頃は守られて、気を遣われることに慣れている。自分の思うとおりにならないものの存在は、子どもたちに我慢強さや、分別を教えてくれる。大人ではできないことである。

今回の研究では、子ウサギが生まれ、毛もなく裸で大人の手のひら乗る程度の大きさから、やわらかい毛が生え、母乳からウサギのえさを食べるまでに育った。同時に年を取ったウサギが死に、その様子も見たり触ったりすることができた。

その間、子どもたちは驚いたり、喜んだり、楽しんだり、悲しんで泣いたり、存分に心を使い、自分事として命をとらえることができた。それは家庭の中にも広がり、悲しむ子供に対して命が終わることについて、保護者からの言葉かけもあった。生きるということを自分とは重ねることは困難であるが、どうにもならない、仕方がないということを体験から学ぶことができた。

##### キャリア教育の視点2「働くこと」

働くことは好きなことばかりをすることではない。必要なことをしたり、相手が喜ぶことをしたりすることに価値がある。

動物にエサをやったり、日の当たるところにおいてやったりすることも大事な仕事である。はじめのうちはウサギをかわいいとは思いますが、触ったり世話をしたりできる子どもは少なく、聞き取りアンケートでは10%程度であったが、この取り組みを通して、クラスの50%の子どもがうさぎと主体的に関われるようになり、必要な世話ができるようになった。

数人の子供が「ゲージの中にずっといるのはウサギが可



哀そうだから広い家をつくってあげたい」と主体的に友だち同士で始めた、ウサギハウス作りは遊びとして発展し、子ども同士で意見を出し合い広げ合って楽しむ経験ができた。何日もかけて取り組み継続して作り上げる達成感を感じていた。物事に主体的に取り組み、継続して集中し、やりきる力がついてきたと言える。

さらに、隣のクラスにも広がり人間関係形成にも役立った。同時に年少組の子どもの関心も集め、小さい子供に優しくする異年齢交流にもつながった。自分たちで作ったウサギハウスの工夫を教員や来園者に自慢げに話をしており、自己有用感や自己効力感を味わえる充実した活動であったことが分かる。



### キャリア教育の視点3「学ぶこと」

キャリア教育の3つの視点は単独ではない、生きることは学ぶことであり、働くことは生きることでもあると同時に学ぶことにもつながる。

今回の活動の学びは、意欲をもって取り組むことや、作り方を自分で工夫すること、友達と協力することや、最後までやりきることを学ぶことであった。

さらに、生まれることと死ぬことについて考えることなどである。

幼稚園の学びは、遊びを通じて行うものであり、動物を使った遊びは、生きること、働くこと、学ぶことのすべてを網羅した遊びになったと言える。

### 非認知能力の育成

本園でとらえている非認知能力につながる活動とその結果子供たちの変容

(1) 課題を達成する力(一歩前へ踏み出す力)

・・・行動力、意欲、希望 チャレンジ精神、好奇心

(5) 感情を調整する力(自分を信じる力 考えぬく力)

・・・自己肯定感、自己有用感、自信、正義、主体性、忍耐、

(3) 人とつながる力(人間関係をつくる力)

・・・チームワーク、共感性、リーダーシップ、思いやり、尊敬

非認知能力の育成に自然体験は効果的である。本園は市街地にあり自然環境としては望ましいものではないが、動物そのものが自然とおなじ効力を持つのである。動物とたくさん触れ合うことは自然に触れあうことになる。

#### ○非認知能力「思いやり」の育成

長いスパンでのウサギの飼育は、遊びたいときだけ、気が向いたときだけというわけにはいかない、弱いものを守りかわいがり続けるという心が育ってきている。子供たちは、

毎日ウサギに声を掛け、抱いたり餌をやったりと世話を続けている。

聞き取りアンケートでは、初めはウサギに触れる子が1割程度であったが、現在は半分ほどの子どもがうさぎと触れ合えるようになり、主体的に関わることができるようになった。

ウサギを介して異年齢の子供たちと遊ぶ機会が増え、ウサギの抱き方やウサギの名前などを小さい子に優しく教える姿も見られるようになった。

### ○責任感

生きるための食事や衛生管理などの手間が必要なことから、責任をもって命を守っていくと自分事として役割を自覚することができるようになってきた。ウサギのための餌などを持参して餌箱に入れる子も増えてきた。家庭の協力も見え隠れするが、家庭の中でウサギの世話について話題になっているということは望ましいことである。

夏休みなどはウサギを預かりたいという家庭も出てきた。

### ○好奇心

ある日新しい命が生まれ、先生の手ひらの上のウサギを見ることで、赤ちゃんは毛がないことや、目が空いていないことなどに気付く。たくさんの子供たちが毎日成長を見に来てその変化を楽しみにし始めた。成長すると嬉しいことなどを体験し、生きることの値にも触れることができた。

同時にほんの少しの時間でも、ウサギの雄と雌を一緒のゲージに入れると子どもが生まれることを目の当たりにして、雄雌の扱いにも気を遣うようになった。

### ○コミュニケーション

友だち同士で相談して、協力しながら自分たちの工夫を形にしていく活動は、意思決定や合意形成の連続であった。実際に、皆での家づくりの活動が行われるようになってからは、お店屋さんごっこなどの園行事においても、協力して取り組む姿があちこちで見られるようになった。

日頃あまり関わらない子供たちも、ウサギハウスの前では声を掛け合っており、隣のクラスのことでもコミュニケーションの和が広がった。年中や年長関係なく遊ぶことが増えた。

自分たちの遊びにウサギを入れることを好むようになり、抱いて園庭に連れて行ってみんなで見せ合って楽しむなど新しい遊びに展開して楽しんでいる。

### ○主体性

動物の幸せを考え、彼らのために環境を考えてつくることで、主体的に取り組むことの楽しさを味わうことができた。毎日「今日もウサギハウスつくる」と教師の指示を待た

ずに行動していた。うまくいかなかったとしてもあきらめずに工夫を続けることや、最後までやりきること、さらに人間関係をつくることなど様々な非認知能力を鍛えることができた。

#### ○自己肯定感・自己効力感

弱いものをいつくしみ、自分でできる精一杯でウサギのためになることに取り組んだ時、役に立つ喜びを感じることができた。保護者や教師などに自慢する子もたくさんいたが、一方誰に褒められなくても、黙々と作業に取り組み、自分の活動を通して自分を認めることができていた。それによって自己肯定感や自己効力感を感じていくことができた。それこそが非認知能力の向上と言えるであろう。

共同研究者

(代表) 清水弘美

須永瑞代

井上あゆみ

大久保美紀

池川美穂

野村幸江

岡本由夏

佐藤優美

角田博美

関根江美